

## 高齢時代と公的介護保険導入と住居の現状

六波羅 美 代

Miyo ROKUHARA

### 1 目的

1997年国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口によると、今後も老年人口比率が上昇し、中位推計で2025年27.4%、2050年には32.3%と、21世紀半ばには3人に1人が65歳以上の高齢者になり、後期高齢層もまたそれに準じて増加する社会の到来が予測されている。このようにして増加する高齢者は家族構成の面でも変化しており、総務庁統計局の「国勢調査」によると65歳以上の親族のいる一般世帯は、一般世帯総数に占める比率が1970年の19.5%から1995年29.1%に上昇している。夫婦のみの世帯が10.0%から23.8%へ、単独世帯も7.4%から17.2%へと大幅に増加し、高齢者が子世帯と同居する三世帯世帯が減少している。

このような現状を鑑み、平成12年に公的介護保険が導入される。公的介護保険導入が家族介護を軽減し、要介護者も専門家による介護サービスを利用できるようになるよう求められている。しかし、導入を目前にして、現在の住居の現状で果たして在宅サービスの役割が果たせるだろうか。総務庁統計局「高齢者の生活と意識に関する調査」によると、住宅に感じる問題点で最も多かったのは、＜住まいが古くなりいたんでいる＞19.3%（60歳以上男女平成7年）である。

また、人口の高齢化が進むなかで、高齢者の住宅内事故の増加が問題になっている。厚生省の「人口動態統計」1997年によると、家庭による不慮の事故死は10,314人で、交通事故死が13,981人である。年齢別では0歳から4歳（414人）、65歳以上（7,483人）では、交通事故死（それぞれ170人、4,878人）より多い。乳幼児や高齢者においては、交通事故死より、家庭内事故死のほうが多いのである。事故発生場所は「居間」「台所」「階段」「浴槽、風呂場」と続き、これらで80%である。（国民生活 1999年12月号）

高齢時代になり公的介護保険も導入され、住宅サービスも利用できるようになるが、果たして老後に見合った住居に建て替えるという選択をする人は、経済的負担から見ても少ないだろう。軽微な住宅改造でも、建物の構造や階高などは難しい。また、便所、風呂等の水廻り空間も相当に費用がかかる。

そこで、現在の住居の実態を松本短大介護福祉学科学生への、アンケート調査結果から現状を探り、これからの望ましい住居のあり方を求めていきたい。

## 2. 調査方法と対象

## 1) アンケート調査

## 2) 調査対象、松本短期大学介護福祉学科1年生 2年生 松本短期大学専攻科

合計 215名

調査実施 1999年7月

## 3. 結果

## 1) 玄関

表1～6に示すとおり、3割の住居には玄関に40～50cmの段差があり、外から玄関までにさらに石段が3段以上あり、車椅子では入れない住居が76%である。

玄関の段差と靴脱ぎ場に手すりの有無をクロス集計で見ると、段差がない住居に手すりがついている件数が多い。またトイレの手すりとの関連では、玄関に手すりのついている住居の方が、トイレに片側あるいは両側に手すりがついている。玄関に段差がある住居こそ靴脱ぎ場に手すりがほしい。(図1.2.)

表1

玄関に段差は		
	件数	%
1. 大変ある	120	57.4
2. 少しある	80	38.3
3. ない	9	4.3

表2

玄関の段差は何cmくらい		
	件数	%
1. 40-50cm	61	29.9
2. 20-40cm	88	43.1
3. 5-20cm	55	27.0

表3

外から玄関まで石段は		
	件数	%
1. ある	111	52.9
2. ない	99	47.1

表4

石段がある人に石段は何段位		
	件数	%
1. 3段以上	32	28.3
2. 2段以下	81	71.7

表5

玄関の靴脱ぎ場に手すりは		
	件数	%
1. ついている	12	5.7
2. ついていない	198	94.3

表6

外から玄関まで車椅子で		
	件数	%
1. 入れる	50	24.2
2. 入れない	157	75.8

図 1

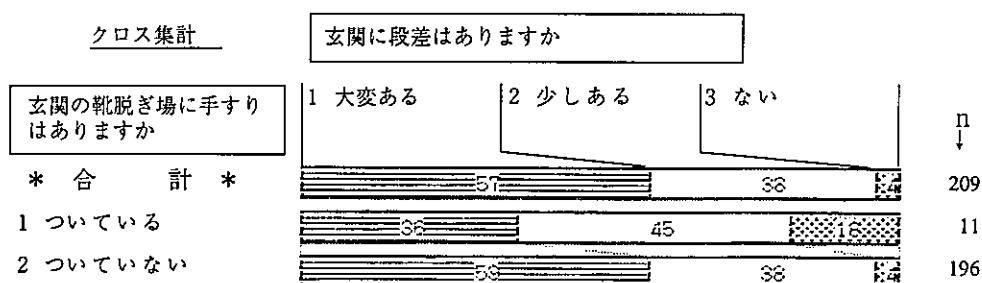
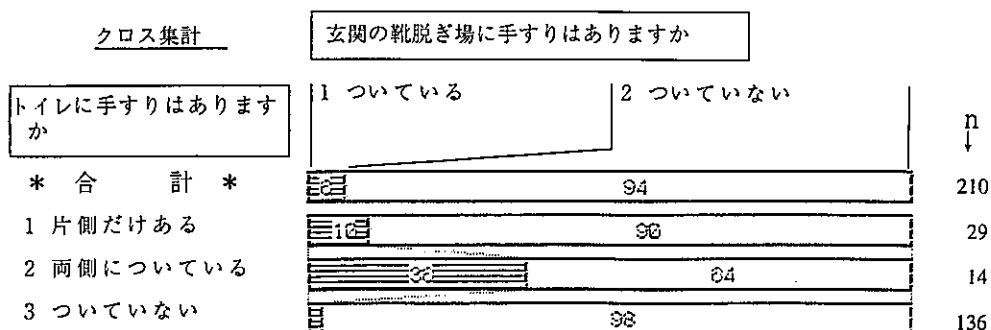


図 2



## 2) 階段

表7～11に示すとおり、階段の蹴上は19 cm以上の急な階段が50%で、踏み面は23 cm以下の階段が49%、そして滑り止めがついていない件数が73%である。フットライトはついていることはめずらしい状況である。

階段の手すりは4割ついているが、6割はついていない。階段に手すりの有無と階段の滑り止めの関連では、手すりが付いている件数の方が滑り止めがついている。またフットライトも同様に階段に手すりがついている件数の方がついている。滑り止めがついていない場合は特に手すりやフットライトがないと危険ではないだろうか。(図3.4)

表7

階段に手すりは		
	件数	%
1. ついている	79	42.0
2. ついていない	109	58.0

表8

階段に滑り止めは		
	件数	%
1. ついている	51	27.3
2. ついていない	136	72.7

表 9

階段にフットライトは		
	件数	%
1. ついている	14	7.4
2. ついていない	174	92.6

表 10

階段の踏み面は		
	件数	%
1. 15-23cm	91	49.2
2. 24cm以上	94	50.8

表 11

階段のけあげは何センチ		
	件数	%
1. 16-18cm	93	50.3
2. 19cm以上	92	49.7

図 3

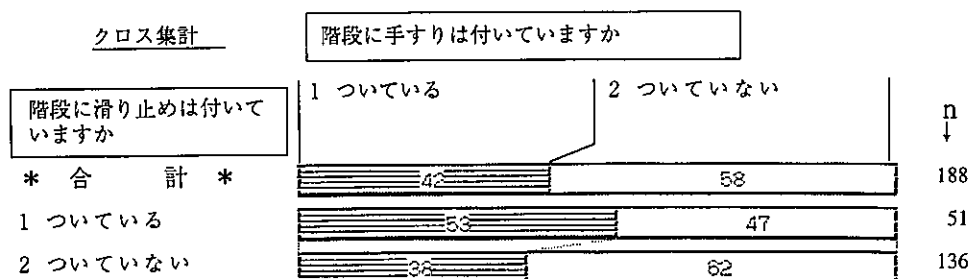
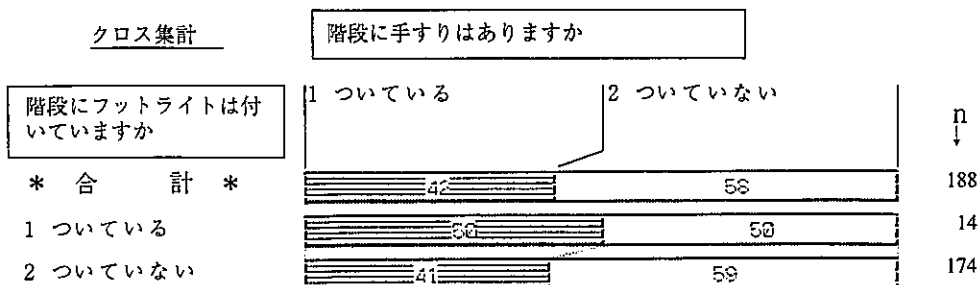


図 4



## 3) 廊下

表12～14に示すとおり、廊下を車椅子で通れる、ぎりぎり通れるを合わせ約80%で、通れない件数が20%である。廊下の幅を広げる改造はかなり難しい。既存の住宅においては半間の廊下が多く、壁を除くと実質75cm位の場合が多い。これが現在普及しつつある幅1メートルに、

まれには1.25メートル幅にするとかなりゆとりが出る。

廊下の幅と廊下の明るさとの関連では、廊下の幅が広い方が明るく、車椅子は通れない狭い廊下は暗いと回答している。廊下の幅は住居の明るさにまで影響している。また廊下の幅と廊下の手すりとの関連では、広い廊下に手すりがついている件数が多い。(図5.6)

表 12

廊下到手すりは		
	件数	%
1. ついている	13	6.3
2. ついていない	195	93.8

表 13

廊下を車椅子で通れる広さは		
	件数	%
1. ゆったり通れる	45	21.6
2. ぎりぎり通れる	122	58.7
3. 通れない	41	19.7

表 14

廊下の明るさは		
	件数	%
1. 明るい	39	18.8
2. ふつう	104	50.2
3. 暗い	64	30.9

図 5

クロス集計

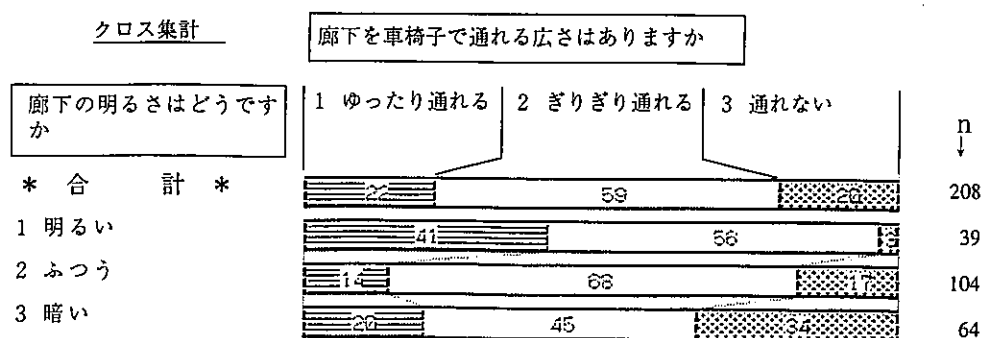
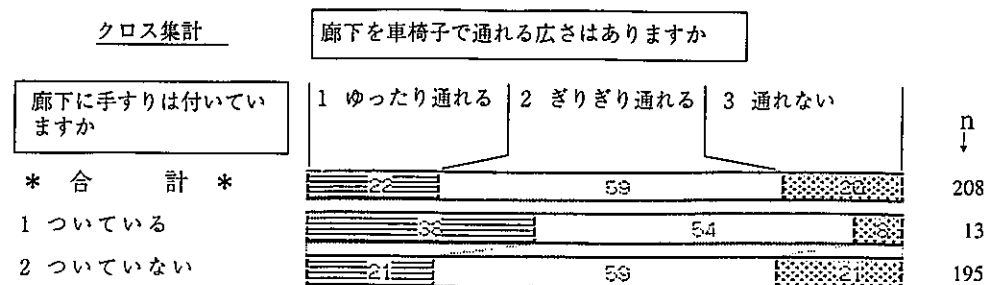


図 6

クロス集計



## 4) 便所

表15～18・(図7)に示すとおり、トイレは洋式が多い。しかし手すりはついていない件数が約80%である。一方両側に手すりがついている件数が6.7%ある。トイレの手すりは公的介護保険で要介護と認定されるとつけられるので利用されたい。トイレは高齢者(調査では高齢者がいない場合は両親)の寝室の近くにあることが望ましいが、45%が近くないとある。高齢になるに従いトイレは寝室の近くにはしいものである。トイレの式と手すりとの関連では、手すりが両側についている場合は和式トイレではゼロであり、この場合は洋式か二つ以上トイレがある場合である。トイレのスペースとトイレの式との関連では、和式トイレの場合に、二人くらいは入れるスペースがない件数が19%である。トイレの式とトイレの温度では和式トイレに寒いとの件数が多い。既存の住宅の和式のトイレは狭くて、介護者が一緒に入るスペースがなく、寒い場所が多いと言えよう。トイレに手すりの有無とトイレの温度との関連では、手すりが片側、あるいは両側についている件数の方が暖かいトイレが多い。これは洋式トイレで広く暖かくという住宅の実現も進行していることを表しているのではないだろうか。(図8.9.10)

表 15

トイレは和式・洋式		
	件数	%
1. 和式	30	14.3
2. 洋式	147	70.0
3. どちらもある	33	15.7

表 16

トイレは高齢者の寝室の近くか		
	件数	%
1. 近く	114	54.8
2. 近くない	94	45.2

表 17

トイレは二人位入れるスペースは		
	件数	%
1. ある	91	44.4
2. ない	114	55.6

表 18

洗面所の蛇口はノブかレバーハンドルか		
	件数	%
1. ノブ	138	67.0
2. レバーハンドル	68	33.0

図 7

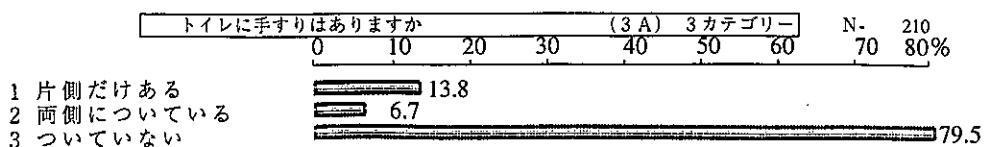


図 8

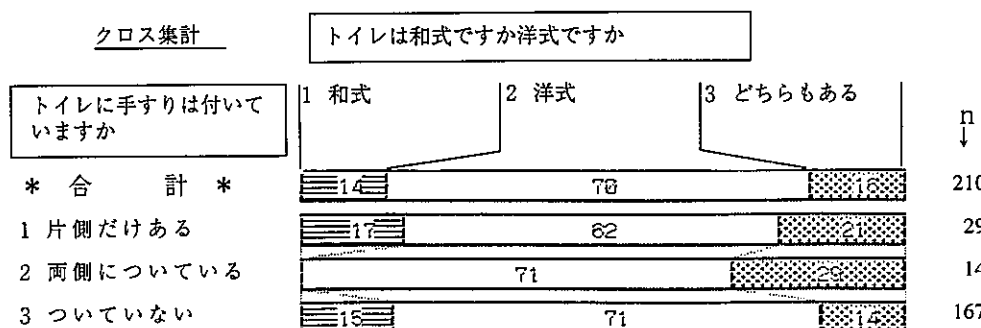


図 9

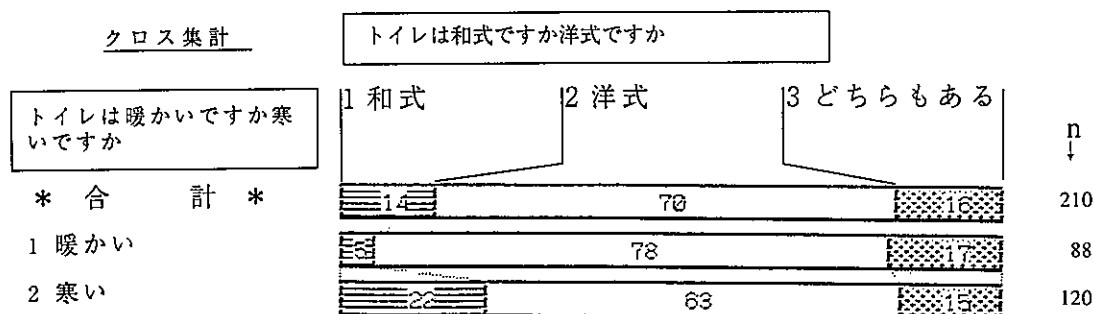
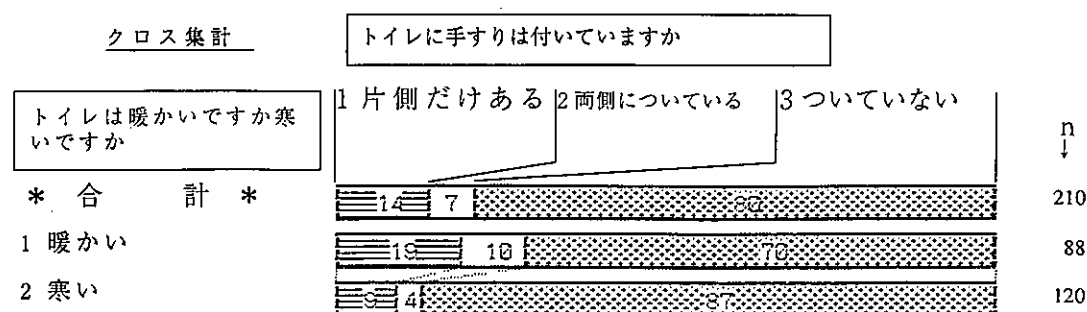


図 10



## 5) 浴室・脱衣場

表19～29・に示すとおり、脱衣場から浴室入り口には段差がある件数が92%であり、段差の高さは5～20cmであるが、まれには20～40cmの住居もある。最近の脱衣場から浴室まで段差なしの浴室は8%であろうか。脱衣場から浴室に介助者は通れない40%、脱衣場から浴室まで車椅子で通れない60%である。これは要介護になった場合に自宅の浴室に入ることは難しくなるのではないだろうか。浴槽の式は半埋め込み式が80%で入りやすい浴槽である。

浴室の床材はタイルが多く、浴槽や洗い場のまわりには手すりが全くない件数が73%で浴室での転倒が起こり得る状況である。公的介護保険において、要介護の場合手すりをつけるくらいは利用できるが、脱衣場から浴室への段差解消あるいは入り口を広くは無理であろう。

家族が浴室で転倒した事がある件数は51件で24.2%である。転倒した人の年齢は60歳以上と19歳以下が多い。学生は自分が子供の頃と回答していた。家族の転倒と浴室の床材との関係では、滑り止めタイルの場合が転倒が最も少ない。また家族の転倒と洗い場の手すりとの関連では、手すりが全くない場合での転倒が最も多く、手すりが十分ある場合には転倒が最も少ない。家庭内事故防止の面からも浴室に手すりをつけ、床材は滑り止めタイルへと改造ができれば、高齢者とは言わず乳幼児から高齢者まで全員に安全な浴室になろう。(図11.12.13)

表 19

脱衣場のスペースは		
	件数	%
1. 広い	8 6	40.6
2. 普通	9 4	44.3
3. 狭い	3 2	15.1

表 20

脱衣場から浴室へ介助者も通れるか		
	件数	%
1. ゆったり通れる	1 7	8.0
2. ぎりぎり通れる	1 0 9	51.4
3. 通れない	8 6	40.6

表 21

脱衣場から浴室入り口に段差は		
	件数	%
1. ある	1 9 5	92.0
2. ない	1 7	8.0

表 22

浴室入り口の段差の高さは		
	件数	%
1. 5-20cm	1 8 8	95.9
2. 20-40	7	3.6
3. 40cm以上	1	0.5

表 23

脱衣場に手すりは		
	件数	%
1. ある	8	3.8
2. 少しある	1 7	8.1
3. 全くない	1 8 6	88.2

表 24

脱衣場から浴室へ車椅子で通れるか		
	件数	%
1. ゆったり通れる	1 4	6.7
2. なんとか通れる	6 9	32.9
3. 通れない	1 2 7	60.5

表 25

浴槽の式は		
	件数	%
1. 埋め込み式	10	4.8
2. 半埋め込み	168	80.4
3. 据え置き式	31	14.8

表 26

浴室の床材は		
	件数	%
1. タイル	130	62.2
2. 滑り止めタイル	18	8.6
3. プラスチック系	58	27.8
4. その他	3	1.4

表 27

浴室のスペースは介護者が入れるか		
	件数	%
1. 入れる	49	23.1
2. なんとか入れる	128	60.4
3. 入れない	35	16.5

表 28

家族が浴室で転倒した事は		
	件数	%
1. ある	51	24.2
2. ない	160	75.8

表 29

転倒した人の年齢は		
	件数	%
1. 60歳以上	17	32.7
2. 40-59	6	11.5
3. 20-39	4	7.7
4. 19歳以下	25	48.1

図 11

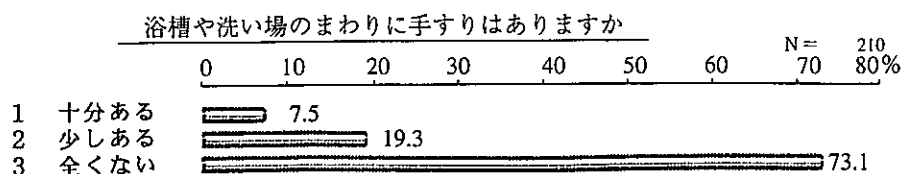


図 12

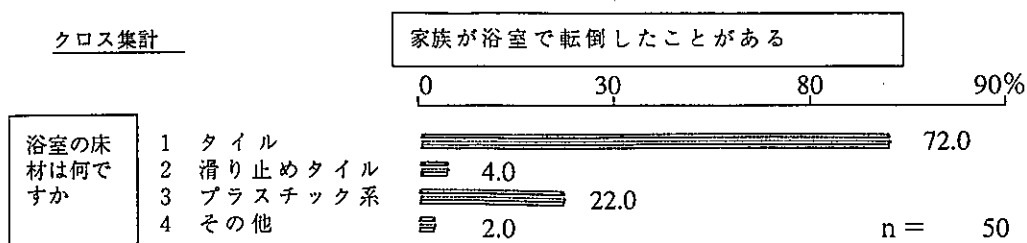
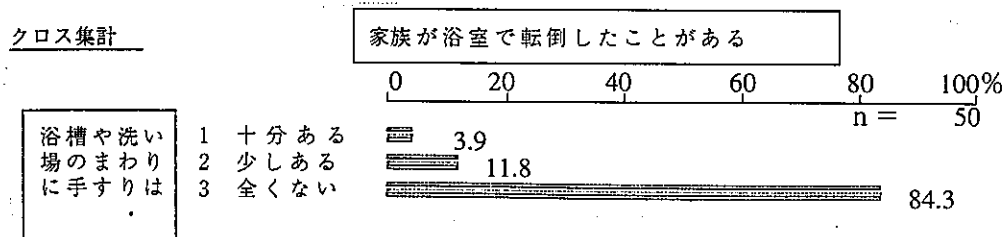


図 13



## 6) 寝室・居間

表30～38・(図14)に示すとおり、床材は畳であるがその上に布団使用が多いが、畳にベット使用が50件あった。これは従来の畳の部屋にベットを使用していることがかなり多いのではない。寝室の入り口や居間の入り口には段差があり、居間の入り口は車椅子では通れないが35%である。コンセントの高さは25cm以下が92%であり、スイッチの高さは1～1.5mが75.3%である。特にスイッチは毎日使用するものであり、高齢者や子供にとっては、高さが高くして使用しにくいのが現状である。もっと自分たちにとって使用しやすいことを主張していくことがこれから必要であろう。

表 30

寝室の床材は		
	件数	%
1. 畳	174	82.9
2. フローリング	30	14.3
3. その他	6	2.9

表 31

布団、ベットどちら		
	件数	%
1. 布団	129	60.8
2. ベット	82	38.7
3. その他	1	0.5

表 32

寝室の入り口に段差は		
	件数	%
1. ある	163	78.7
2. ない	44	21.3

表 33

寝室に手すりは		
	件数	%
1. ある	10	4.7
2. ない	201	95.3

表 34

寝室の日当たりは		
	件数	%
1. 良い	93	44.1
2. ふつう	79	37.4
3. 悪い	39	18.5

表 35

寝室のスイッチの高さは(壁)		
	件数	%
1. 1メートル以下	10	11.2
2. 1-1.5メートル	67	75.3
3. 1.5メートル以上	11	12.4
4. その他	1	1.1

表 36

寝室のコンセントの高さは		
	件数	%
1. 20-25 cm	188	92.2
2. 35-45 cm	12	5.9
3. 50cm以上	1	0.5
4. その他	3	1.5

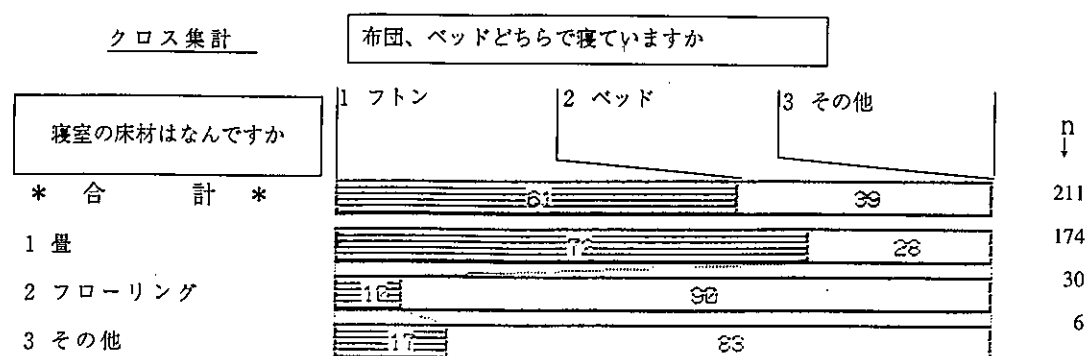
表 37

居間の入り口に段差は		
	件数	%
1. ある	167	81.1
2. ない	39	18.9

表 38

居間の入り口は車椅子が通れるか		
	件数	%
1. 通れる	135	64.3
2. 通れない	75	35.7

図 14



## 7) 台所

台所では車椅子の使用はできないが145件で68.4%である。ガスコンロの点火方法は押し回しが約40%である。これは高齢になり手の力が衰えてくると、なかなか点火しにくい。水道の蛇口も回す式のノブが74件53%である。これも手首の力が衰えると、水がなかなかきちんと止まりにくい。高齢になった時に水道の蛇口をレバーハンドルに替えたり、ガスコンロを替えたりできればよいが、現実にはなかなかできないのではないだろうか。表39—43

表 39

食事スタイルは		
	件数	%
1. 椅子使用	125	59.0
2. 座式	73	34.4
3. その他	14	6.6

表 40

台所の形態は		
	件数	%
1. キッチン	74	35.9
2. ダイニングキッチン	107	51.9
3. リビングキッチン	28	13.6
4. その他	3	1.4

表 41

台所は車椅子でも使用できる		
	件数	%
1. 使用できる	67	31.6
2. 使用できない	145	68.4

表 42

台所の水道の蛇口は		
	件数	%
1. ノブ	74	35.4
2. レバーハンドル	107	51.2
3. その他	28	13.4

表 43

ガスコンロの点火方法は		
	件数	%
1. 押し回し点火	85	39.9
2. 押し点火	124	58.2
3. マッチその他	4	1.9

#### 4. まとめ

1) 玄関に段差がない住居に手すりがついており、広い廊下の住居に手すりがついている割合が多い。和式トイレには手すりがついている割合が少なく、介護者も一緒に入れるスペースも少なく、トイレの温度も寒い住居が多い。滑り止めのついていない階段には手すりがついていない割合が高い。このような結果を見た時、住環境の格差はかなり大きいのが現状と考えられる。

2) 浴槽は半埋め込み式とかトイレは洋式とかはかなり普及してはいるが、脱衣場から浴室には介助者は一緒に通れない、段差があり車椅子でも入れない、トイレのスペースは狭く、二人は入れない住居が多い。浴槽、便器等部分的には替えてもそれに関連するものを全部改修することはなされていない。

3) 浴室での転倒に見られるように、浴室に手すりが付いている割合が高い程、転倒の割合は少ない。浴室の床材が滑り止めにできている程、転倒の割合は少ない。しかも転倒は子供と高齢者に多い。安全性の追求は事故が起こる前に家族全体の問題として考えていくことが必要である。

4) 居間や寝室のスイッチの高さが高い件数が多く高齢者や子供には使いにくい。コンセントは25cm以下が92%、水道の蛇口が回す式のノブ、ガスコンロの点火方法の押し回し式等は、既存の住居では一般的にあったが、この改修も現在においても難しいのが現状である。

5) 公的介護保険で認められている住宅改修は、要介護と認定を受けた人に限られ、しかも

手すりをつける、トイレを洋式に、床を滑りにくく等の簡単な工事の場合は有効であるが、今回の調査結果から、トイレに手すりを付けるは利用できるが、浴室、廊下、階段、台所、寝室、トイレの広さ、等の問題は公的介護保険で、住宅改修費限度額20万円を利用しても自己負担が余りに大きい。

6) 公的介護保険では要介護の認定を受けた後の改修であるために、要介護の前には利用できない。そこでこれから公的介護保険が実施される時代においては、自分が本格的な老後を迎える前に、自分の住まいが安全かどうか、老後暮らしていけるのか総点検をして、経済力があるうちに改造し、要介護になった時に在宅でのサービスが十分受けられることが望ましい。

7) 住環境の格差は大きく、高齢者には大変住みにくい住居も多いが、住宅改修にかかる費用は大きく、改修できない場合が多いのが現実である。要介護の認定を受けた後、トイレ全体の改修をすれば排泄の自立ができるのではないかと認められたら、公的介護保険でその適用範囲の拡大はできないだろうか。

8) 調査結果から住民は、高齢者だけでなく子供にも、高齢者にも誰にとっても危険は危険である。誰にとっても安全で住みやすく使いやすさを主張し、みんなにとって使い勝手のよいものを求め、「ユニバーサルデザイン」の概念へと願う。

#### 参考文献

「高齢社会白書」1999年 総務庁編 P 86

「国民生活」1999年12月号P86「家庭内事故」国民生活センター消費者情報部

資料は（1996年全国18の協力病院から国民生活センター危害  
情報システムに報告されたもの）

「日本人の生活」1998年 日本家政学会 建ばく社P178「高齢者の生活」

馬場 紀子

